

日本における自動速度制御装置の受容性に影響する要因の検討

奥田 遥大

本研究は、日本のドライバーにおける自動速度制御装置 (Intelligent Speed Assistance / Intelligent Speed Adaptation ; ISA) の受容性に影響する要因を、運転スタイルを中心に検討した。

研究 1 では、日本で開発された運転スタイル尺度である運転スタイルチェックシート (Driving Style Questionnaire; DSQ) を用いてオンライン調査 (N = 150) を実施し、ISA の受容性が「利用」「購入」「義務化」の三因子から構成されることを探索的因子分析により確認した。さらに、重回帰分析の結果、運転に対する消極性や心配性的傾向といった運転スタイルが ISA 受容性と正の関連を示し、速度超過傾向 (Speeding Habit Scale ; SHS) は負の関連を示した。ただし、DSQ の一部下位尺度には信頼性の制約が認められた。

研究 2 では、より包括的で信頼性の高い多次元運転スタイルインベントリ (Multidimensional Driving Style Inventory ; MDSI) を用いてオンライン調査 (N = 157) を実施し、ISA 受容性の三因子構造を確認的因子分析により再度支持した。重回帰分析の結果、慎重・安全志向の運転スタイルが ISA 受容性と正の関連を示し、速度超過傾向 (SHS) は研究 1 と同様に一貫して負の関連を示した。

両研究の結果から、ISA の受容性は運転スタイルや速度に関する態度に影響されることが示された。特に、速度超過を望む傾向が強いドライバーほど ISA を受け入れにくいという構造が確認され、ISA が本来ターゲットとすべき高リスク群にこそ受容されにくい可能性が示唆された。これらの知見は、速度遵守意識を高める教育的介入や社会的キャンペーン、ISA 搭載車両への補助制度などが普及促進に有効であることを示す。今後は、ISA の受容性を高めるための介入の効果を実証的に検討することが課題である。
(安全行動学)